

景色はすっかり夏だ。空は高いし、街路樹は鮮やかな緑に彩られている。なんてちよっと叙情的に見たところで、その景色が素敵なものになる訳でもない。二年生のいまにして飽きているのは、この通学路を歩くのが実質八年目になるからだ。中学から大学のいまに至るまで、わたしはずっとこの道を歩いている。それはおそらく、何事もなければあと二年とちよっと続くのだろう。

身に纏っている服装は私服に変わったけれど、周囲の風景はさして変化を見せることはない。強いて言うならいくつかの店が看板を変え、外装を変えたくらいだ。

正門を潜って、まっすぐ語学棟のほうへ。

教室に入るとおはよ、と声をかけられる。同様におはよ、と気の抜けた返事をして、わたしは空いていた席に鞆を置いて腰掛けた。

ああ、でもそこら辺は楽になったな、と思う。

固定のクラスがある訳でもないから、こうして顔見知りと挨拶や短い会話をするくらいで済むのはありがたかった。内部進学ということもあって知り

合いは多かったけれど、高校まで仲のよかった友達はほとんど違う学部か、あるいは別の学校に進んでいたから、構内ではのんびり過ごせている。

のんびり、か。

何かと面倒くさがりなだけなのかも知れない。その割に小心者だから、こうしてサボることもせずに板書を眺めて、かつちりと済ませてある予習に沿ってノートをとって。それから少しだけ考える。

講義も、ひと付き合いも、似たようなものなのだ、と。

二限と三限が空いていたので、混む前に昼食を済ませてしまう。それも終われば、どうやって暇を潰そうかと普段は考えるのだけれど、最近は旧図書館に足を運ぶことが多くなっていた。

数年前にできた新図書館は冷暖房完備、新刊の蔵書も多いとあっていつでも混んでいるのに比べ、この旧図書館は面白いくらいにひとが少ない。一階の開架にあるコピー機の前、それからPCコーナーにそれなりのひとが見え

るくらいで、二階に上ればその数は更に少なくなる。

背が灼けて判別しにくくなっている全集の一冊を引き抜いて、わたしは空いている——ほとんどがそうなのだけれど——席に座る。べら、と目次をめぐり、当たりだと思った。おおよその見当をつけてはいるけれど、こうして目次を見るまでは収録作家も分からない全集。今日は横光利一であったことに満足して、ページを捲っていく。

無心に文字を目で追っているうちに、二限終了のチャイムが鳴った。開け放たれた窓から、ひとの動く音や声が聞こえてくるけれど、ひどく遠くに感じられる。こつ、こつと板敷きの床を歩く音が聞こえ、ふつと顔を上げると、いつものひとが奥の席に座っているのが見えた。

ああ、水曜日だ、と改めて気付く。毎週水曜日の昼休みから三限の終わりまで、ああして何かしらの本を読んでいるのだ。

まじまじと見た訳ではないけれど、やや幼い感じの顔立ちと、それからいつも羽織っている白衣。理学部のひとなのだろうか。くたびれた様子のない、ぱりっとした白衣からすると、一年生なのかも知れない。

とはいえ、話しかける理由もないから、わたしにとっては水曜日のひとつであるという認識しかない。そういうものだ。

話しかける勇氣、ん……勇氣？

別に話しかける必然性とか、ないよね。

§

「早宮さん、これからちょっと時間ある？」

四限の講義が終わって、教科書を鞆に仕舞い込んでいたときだった。唐突な問いに、わたしは怪訝そうに問い返す。

「……はい？」

目の前でここにこしていたのは立野先生だった。

「えっとねえ、今日ちょっと教材で使った資料が多くてね、もしよければ運ぶの手伝ってほしいんだけど」

「ああ、分かりました」